

始まりのブザーが鳴るまで問題冊子、解答用紙に手を触れずに、  
左記の注意事項に目を通しておくこと。

- ◎ 問題用紙は1ページから16ページまでであるので、始まりのブザーが鳴ったらすぐに確認すること。
- ◎ 最初に別紙の解答用紙に受験番号と氏名を記入してから問題を解くこと。
- ◎ 受験番号は所定の欄に記入後、それに該当するマーク欄にしっかり濃くマークすること。
- ◎ 解答はすべて解答用紙の所定欄からはみ出さずに記入すること。
- ◎ とじてある問題用紙をばらばらにしたり、一部を切り取ったりしないこと。
- ◎ 終了のブザーが鳴ったら筆記用具を置くこと。
- ◎ 問題冊子は持ち帰ってもかまわない。

受験番号マーク例

良い例	●	悪い例	✓ ○ ●
-----	---	-----	-------

◎ 選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号を記すこと。

◎ 字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】 次の文章を読み、後の問に答えよ。

《著作物利用許諾申請中》

【二】次の文章を読み、後の間に答えよ。

①たとえ話をしよう。

あじさいという花について考えてみる。②大きな薬玉くすたまの様な固まりがいくつもある。色は白や紫、薄いピンクなど、徐々に変わる。あじさいという花が自分にはどう見えるか。

③あじさいの 

A
---

 て 

B
---

 勝ちけり

随分前の拙句だが、色のせいではない。一つの固まりの中にまた、いくつもの小さな花があつて、その数が増えるほど淋さびしさが勝ってしまう。集まれば集まるほど淋しい。

それは人に似ている。大都會けんごうの喧騒けんざうの中を歩いていると、人が多ければ多いほど、孤独を感じてしまう。このたくさんの人々の中で私はひとりといった思いを抱く。群れば群れるほど淋しさは増す。

淋しさをまぎらわそうと群れているのに、逆に淋しさが増してしまう。

あじさいを書くには、④孤独感こどくかんを書くしかない。

私の実家のあつた等々方とどろきの家は近所の人から「あじさいの家」と呼ばれていた。垣根には白い小さなつるばらがからまつてはいたものの、庭のほとんどを占めていたのは、大木の他はあじさいであった。なぜその頃あじさいが好きだったのか、大失恋をした頃だったからか、それとも一時心を寄せた事のある年上の男と一緒に鎌倉のあじさい寺に行ったせいだったのか。

北鎌倉の小さな寺、明月院はあじさい寺と呼ばれて、時期になると観光客の長蛇の列が続くというが、私が放送の仕事をしていた頃には訪れる人も少なかった。誘われて寺の入口にある細い階段を昇ると、両側に青紫のあじさいが列つらなっていた。私たちは無言でその階段を昇った。

その男はひねくれた所のある人で、私はひそかにある詩をもじって、「まがりくねった男が一人……」などといっていた。

明月院に詣でた後、彼は言った。「先に行くよ」

私はしばらく間をおいて石段を降りはじめた。ひよる長い背が通りすぎるたび、両側に群れ咲いたあじさいが、なまめいて見えた。私の知らない秘密を共有するかのよう……。

彼には想い出があったのだ。一人置いてけぼりにされた淋しさに胸が張りさけそうになりながら、後を追った。あじさいは無表情に私を迎えた。彼に見せたなまめかしさなどかけらもなかった。その数が無数であればあるほど、私は孤独を胸に持ち続けなければならなかった。

あじさいについてのエッセイを頼まれた時、私はその事を書いた。

人によってはあじさいの固まりは華やかに見え、各地のあじさいの名所が流行はやっているであろう。それとも淋しいからこそ、たくさん群がって見に行くのであろうか。

あじさいは私を拒絶する花だ。だからこそあじさいに惹かれる。なぜ私を拒絶するのか。 magari くねった男に見せた媚こびにも似たなまめきは何なのか。その人とあじさいの共有している秘密とは何なのかを知りたいと思う。ひとり孤独に陥った私の感情とは何であったか。それは小さな嫉妬ではなかったのか。

自分の心を掘り下げていってみると、古代遺跡を発掘するのに似て思わぬものにつきあたる。壊れぬように土を払ってみると、そこには見た事もない自分がある。気付いた事のない感情がある。

それを言葉にして表現する。「あじさい」という題のエッセイには、私の心の奥の、目に見えないものを表現する。目に見えないものを目に見える言葉を借りて表現する。私はかつて明月院で味わった孤独感を書かないわけにいかないだろう。あじさいとその男との秘密と、拒絶された私の姿を描く。初めて気付いた私の心に巢食う嫉妬の感情にも触れないわけにはいかない。

あじさいの花言葉は、私にとって「嫉妬」なのだ。

嫉妬などあろうはずがないと思っていた。⑤ 《掘り下げるうちに私はそこに到達してしまった。

真実を言葉にして書く事で確かめ定着させる。後でもう一度土をかぶせてしまおうにしても。

ものを書く事は恥をかく事だと、常々私はいつている。あじさいのたとえでも、私は自分の心の奥に巢食っている嫉妬に気付いて、と

まどった。認めるべきか否か。文字として定着させていいものかどうか。目を覆って知らん顔をして通り過ぎたかった。そうすればあじさいと淋しさだけの美しい話ですむかもしれない。それでは嘘をついた事になる。

気付いてしまったのだ。私の心の奥に隠した醜さを。それをさらす事は、恥をかく事だ。読んだ人たちが何と思うだろうか。私の人柄まで誤解されてしまうかもしれない。書かねば嘘になる。表面だけのきれいな事だ。表面だけで済んだ文章は決して人の心を打たない。共感を得ない。思い切って恥をさらしてこそ真実が感じられるのだ。

自分を偽らずに見せるためには、決断が必要になる。書かねばならぬと決断する潔さを持たなければ、文章は書けない。愚痴や不満をぶつけてみても仕方ない。いいわけなど誰も聞きたくはない。

あじさいがなぜ淋しく感じられるのか、表面的な言葉を並べてみても虚しいだけだ。嫉妬といういやな感情を持った自分をいくらいいわけしてみてもはじまらない。

堂々と恥をかく事が必要である。

日本文学の最高峰といわれる『源氏物語』<sup>⑥</sup>。この物語は堂々たる恥の文学である。光源氏という一人の美しく才能溢れる男を主人公に、彼の女遍歴という恥を描いていく。光源氏は、時の天皇と桐壺の女御という、数ある女性の中で寵愛を得た女との間に生まれた。

決して位の高い女ではない。その母桐壺の女御の面影を求め、光源氏は、父帝の愛する藤壺とひそかに契り<sup>ちぎ</sup>を結び、罪の子を作ってしまう。父帝はその事を知らない。その事が後に自分の妻女三宮<sup>おんなさんのみや</sup>と柏木との密通というしつぺ返しをうける運命のいたずらを含めて、

⑦ □ 沙汰には出来ない恥の連続なのである。

光源氏の数多くの女遍歴は、最初の女、藤壺の面影を追い、満たされぬ思いに次々と別の女と関係を結ぶ恥多い人生でもある。

その事が実に堂々と描かれている。平安時代は一夫多妻、妻問い婚が当り前だったとしても、紫式部は、ごまかす事なく、正面からその事を描いている。あまりに堂々としているので、私たちは只々<sup>ただただ</sup>圧倒されるのである。

『源氏物語』はたくさん作家が現代語訳を試みている。与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、近くは瀬戸内寂聴などそれぞれ特徴があり、その作家の源氏になっているが、当然ながら原文が一番堂々としている。

修飾やきれいな事ではなく、すばつと言いつつ潔い。恥をかいて恥を知らない文章、<sup>⑧</sup>とも見える、その態度こそ、書くという

事なのだろう。

外国語訳も多く出ているが、日本人の作家の訳よりもストレートで、原文に近いという。作家個人の思い入れがない分だけ、直じかに心に響いてくるのではないだろうか。

紫式部は、あの時代にあつて書くという事は、恥をかく事であると知っていて、実践している事に驚かされる。

その後、ずっと女性の作家が出られる社会状況になく、明治になって樋口一葉⑨が出る。一葉は貧しさの中でまっすぐに庶民の生活を見つめ、堂々とその事を文章にした。人に威張れぬ暮らしの中の恥を文章にした。男女の仲にしても下町の男女の感情を生き生きと筆にした。その正面切った無駄のない文章、きれいな事ではない真実の味わいがある。

(下重暁子『人生という作文』)

問一 — ①はどのようなことを伝えるための例か。

- 1 恥ずかしがらず文章を書き続けることで文章力が向上するという事
- 2 心に響く文章を書くためには人との関係を大切にすべきだということ
- 3 ありふれたものと真剣に向き合うことで文章が味わい深くなるということ
- 4 良い文章を書くためには自分自身を見つめ直すことが必要だということ

問二 — ②と同じ種類の比喩が用いられているのはどれか。

- 1 授業が終わったら友人とファミレスでお茶しよう。
- 2 昨日から母は鬼のごとく怒っている。
- 3 猿も木から落ちるのだから気を引き締めよう。
- 4 趣味について語る彼女の目はキラキラと輝いていた。
- 5 若い時ほど朱に交われれば赤くなるものだ。

問三 — ③の A・B に入る語を本文中からそれぞれ抜き出し、俳句を完成させよ。

問四 — ④の説明はどれか。

1 自分を置き去りにして男があじさいの方に進んで行ったため、あじさいだけでなく男からも拒絶されているという疎外感を覚えた。

2 密かに慕っていた男があじさいを通して昔の恋人に思いを馳せている姿を見て、自分の恋が叶わないことを悟り、切なさを覚えた。

3 男の心を誘うように振る舞うあじさいが自分の知らない秘密を男と共有していることに気づき、のけ者にされているように感じた。

4 男とあじさいの出来事によって、結局人は分かり合うことができない生き物であることを知り、人が抱える本質的な虚しさを感じた。

問五 《 》 ⑤ 《 》に入る次の文を適切な順番に並び替えよ。

1 嫉妬という、避けて通りたい嫌な自分を見てしまった。

2 男とあじさいが親密にならずき合おうとも、私とは関係ないと思っていた。

3 それが真実なのだ。

4 どうやらちがったのだ。

問六 — ⑥と同時代に成立した作品はどれか。

1 『万葉集』                      2 『平家物語』                      3 『徒然草』                      4 『奥の細道』                      5 『枕草子』

問七 — ⑦の □ に漢字一字を入れて熟語を完成させよ。

問八 — ⑧ に入る語はどれか。

1 投げ遣<sup>や</sup>り                      2 反面教師                      3 開き直り                      4 他人行儀                      5 言い掛かり

問九 — ⑨が著した作品はどれか。

- 1 『坊っちゃん』      2 『高瀬舟』      3 『トロッコ』      4 『たけくらべ』      5 『人間失格』

問十 本文の内容に合うものはどれか。

- 1 「まがりくねった男」は筆者より年上で、筆者と同様に放送関係の仕事に就いていた。  
2 『源氏物語』の堂々とした文章を外国語に訳すことは難しく、様々な作家が苦勞している。  
3 筆者は自分の人柄を誤解されることを恐れるが故、ありのままの自分を文章に書くことにしている。  
4 人は一人ぼっちになって初めて、大人数の時には気づかなかった孤独に直面するものである。  
5 古代遺跡の発掘とエッセイの執筆は一見関係なさそうに見えるが、その実似ているところがある。



【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

昔徳言といふ人、陳氏と聞こゆる女にあひぐしたりけり。かたちいとをかしげにて心ばへなど思ふさまなりければ、互ひに浅からず思ひかはして年月を経るに、思ひのほかに世の中乱れて、ありとある人、<sup>②</sup>アもイもさながら山・林に隠れまどひぬ。さがたき親・はらからも四方<sup>よ</sup>にたち別れて、おのがさまさま逃げさまよへる中に、<sup>③</sup>この人別れを惜しむ心誰にもすぐれたりければ、人知れずもろともあひ契りけり。「我も人もいづかたとなく失せなん後、おのづから世の中しづまりて又もあひ見る事ありなんものを、その程のありさまをばいかでか互ひに知るべき」と聞こえさするに、女の年ごろ持ちたりける鏡を中より切りて、おのおのそのかたがたを取りて、「月の十五日ごとに市に出だして、この鏡の半ばを尋ねさするものならば、必ずあひ見て互ひにそのありさまを知るべし」と言ひつつ、いといたううち泣きて別れ去りぬ。その後この夫恋しさわりなくおぼえていたづらに月日を過ぐすままに、「いかなる人に心をうつして契りしことを忘れぬらん」と、<sup>④</sup>胸の苦しさをさへがたくぞおぼえける。

ます鏡割れて契りしそのかみのかけは<sup>⑤</sup>いづちかうつり果てにし

かやうに思ひやりけるにしも、色かたちのなまめかしく華やかなるにやめでたまひけん、時の親王にておはしける人にかぎりなく思ひかしづかれて年月を経るに、<sup>⑥</sup>ありしには似るべくもなきありさまなれど、この鏡のかたがたを市に出だしつつ、昔の契りをのみ心にかけて世の常は下燃えにてのみ過ぐしけるに、鏡の割れ持ちたる人として尋ねあひて、男・女のありさま互ひにおぼつかならず知りかはしつつ。女これを聞きけるよりおぼえず悩ましき心地うち添ひて、うつし心ならぬけしきを見とがめて<sup>⑦</sup>あやしみ問ひたまふを、さすがに覚えてしばしば言ひまぎらはしけれど、強いてのたまはずればわびしながらありのままに聞こえさせつ。親王これを聞いたまふに<sup>⑧</sup>御袖もしばりあへず、あはれにいみじくおぼされけるにや、装ひいかめしきさまに出だしたてて、昔の男のもとへ送りつかはしたるに、徳言かぎりなくうれしきにつけてもまづ涙ぞ先立ちける。

契りおきし心にくま<sup>⑨</sup>やなかりけむふたたびすみぬ中川の水

いやしからぬありさまを振り捨てて昔の契りを忘れざりけん人よりも、親王の御なさけはなほたくひあらじや。

問一 — ①とはどういうことか。

- 1 偶然出会ったということ
- 2 共に暮らしていたということ
- 3 言い寄っていたということ
- 4 一緒に出掛けたということ

問二 — ②の ア ・ イ には対義語が入る。適切な語を二つ選べ。(順不同)

- 1 高き
- 2 すさまじき
- 3 美しき
- 4 いやしき
- 5 若き
- 6 恐ろしき

問三 — ③とはどういうことか。

- 1 徳言は陳氏以上に別れることを悲しみ、誰よりも嘆いたということ。
- 2 陳氏は徳言との別れを悲しみ、誰とも会わなくなったということ。
- 3 徳言も陳氏も別れを悲しむ気持ちが誰よりも強かったということ。
- 4 徳言は陳氏と別れる悲しみを誰にも明かさなかったということ。

問四 — ④はなぜか。

- 1 陳氏と別れてしまったことを後悔しているから。
- 2 陳氏が約束を破ったのを他の人から伝え聞いたから。
- 3 陳氏に会えない間に他の人に惹かれてしまったから。
- 4 陳氏が心変わりしたのではないかと不安になったから。

問五 — ⑤とは何か。

- 1 人影
- 2 月影
- 3 幻影
- 4 遺影
- 5 面影

問六 — ⑥とはどのような「ありさま」か。

- 1 偉そうに思いやりがなくなったさま
- 2 豊かで幸せな生活を送っているさま
- 3 病気でやつれてしまったさま
- 4 見違えるように美しくなったさま

問七 ⑦ に入る人物を本文中から漢字二字で抜き出せ。

問八 — ⑧はどういう様子か。

- 1 あきれ果てた様子
- 2 同情している様子
- 3 腹立たしく思っている様子
- 4 うらやましく感じた様子

問九 — ⑨は何のことか。

- 1 悩み
- 2 偽り
- 3 憐み あわれ
- 4 恐れ
- 5 弱み

問十 本文において「鏡」はどのような役割を果たすものか。

- 1 昔を思い出させてくれるもの
- 2 離れている相手の心を映すもの
- 3 売って生活の足しにするもの
- 4 再会のための目印となるもの

【四】 次の傍線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直せ。

- 1 合唱コンクールでシキをする。
- 2 新生活にあたりケンヤクを心がける。
- 3 厳かな雰囲気の中、式がとり行われた。
- 4 長年のコウセキが認められ、昇進する。
- 5 書道の授業でハンコをホる。
- 6 猛暑で自然と汗が滴る。
- 7 鎌倉時代に建立された寺院。
- 8 新しい条例は四月一日にシコウされる。
- 9 軽々しく金銭のタイシヤクをしてはならない。
- 10 入学後はクラブに入ることをススめる。